

本学会名誉会長 樋口清之博士を悼む

加 藤 有 次*

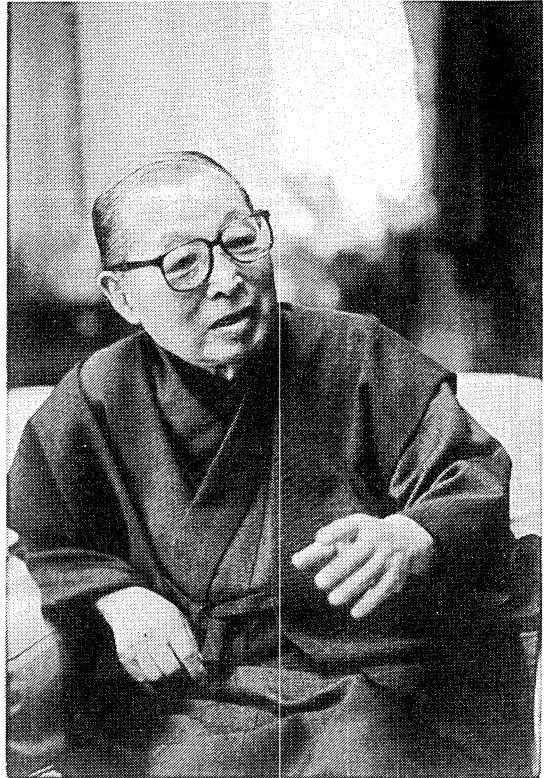
樋口清之先生がめでたく米寿をお迎えになるのでその祝賀を催すために、昨年春から数回お宅へご相談にお伺いした。その時お御足が少々ご不自由であられたが、相も変わらずお元気でマスコミがいう「しゃべる博物館」の如く蘊蓄あふるるお話を拝聴した。そして米寿祝賀会の準備は順調に進捗し、11月10日にホテル・オオクラで開催の運びとなった。ところが9月に入って突然病院に入院なさったという知らせを受けて一同愕然とした。その後ご容態は良好と伺い安堵していたところ、突然ご逝去の訃報を受けた。2月21日午後3時50分、急性腎不全のため日本大学駿河台病院で死去、葬儀・告別式は2月25日、世田谷の豪徳寺で各界約700名が参列し、故人との別れを惜しんだ。誠に残念至極である。

一方、米寿記念論文集も発刊間際を迎えていたところであり、ご覧頂けなかったことが大変心残りである。

樋口先生のご先祖は、奈良県桜井市（旧磯城郡織田村）にあった織田長益（有楽斎）に発し、先生のご祖父は明治になって第六十八国立銀行（現南都銀行）の設立に参加されたり、儒学国学を学んだ学者でもあった。そして先生のご尊父は、広島高等師範学校及び京都大学を経た植物学者であり、また一方

各地中学校・高等女学校及び師範学校等の校長を歴任された、いわば学者であり、教育者でもあった。そういうご家系のご出身であればこそ、また歴史的風土に育まれたからこそ奈良県立畝傍中学校時代、考古学に興味を持たれ、県内各地の調査をされ、三年生の時、初めて「考古学雑誌」に雑報を投稿されたという。そういう天才的少年時代に、学校では東大出身の中宮寺弥勒論など優れた論文を残された原田恭介先生、そして鳥居龍蔵博士の講演を聴かれて、考古学への情熱を燃やされ、その学問がはじまったのである。

大正14年には、約半年間毎日曜日ごとに三輪山麓祭祀遺跡の調査の結果、神体山中に盤座があることをつきとめて、当時朝日新聞に報道されて高橋万次郎宮司を激怒させたという。のちその成果は「考古学研究」に発表されていた。いずれにしても大正14・15年（昭和元年）にわたって、「考古学雑誌」・「人類学雑誌」・



*かとう ゆうじ

全日本博物館学会会長・國學院大学教授

「考古学研究」その他の学術雑誌に十数編の論考を発表され、少壮学徒としての鬼才ぶりを世に呈示された。そして鳥居龍蔵先生をしたって國學院大學に入学され、また先生のお宅から徒歩で僅か15分と離れていない所に森本六爾先生の実家があり、いつも帰郷の度に激励されたという。考古学を志すのに至ってめぐまれた環境と言ってよいであろう。

大学に入学されてからは、さらに矢継ぎ早に諸論文や報告書を考古学関係の諸雑誌に発表されている。これも偏に先生の実力と勤勉さの結果の賜物であったことは勿論のこと、数多くの知名な先学の方々との知遇を得られたからでもある。これは如何なることでも先生の活気あふるる向学心のある証である。時には大山柏公爵にお宅の書斎で史前学の講義を受けたり、大山史前学研究所では、甲野勇・宮坂光次先生、東大人類学教室では松村瞭・八幡一郎先生、そして先生の先輩としては大場磐雄先生、さらに杉山寿栄男・後藤守一先生らの御指導を受けられたという。当時東京高等師範学校には、三宅米吉校長先生、帝室博物館には高橋健自先生を訪ねたり、特に高橋健自先生は畝傍中学校の元教諭だったことから、親しく温かく迎えられたという。昭和4年には、小金井良精先生から1年間にわたり解剖学教室で組織解剖や計測の講義を受けられたり、日本考古学会の例会に毎月山上御殿に出かけられたのも先生の当時の深い思い出となっておられるようであった。

また考古学という物質文化に興味を持たれたことから、必然的に指向されるものが、資料室の必要性である。昭和3年大学の専務理事桑原芳樹先生にそれを訴え、ご理解を賜ってベニヤ板商の新田長次郎氏のご寄付を受け、不足分を先生のご尊父からご負担を頂き、やっとの思いで本館二階の最も見晴らしのよい部屋に先生の収集品の全部を寄付されて考古学資料室の開室を見ることができたのである。しかしのち、御真影金庫のある学長室の上に資料室があるということで、昭和18年学生大会の決議で、考古学は不敬の学問ということになり、追放されようとした。先生は当時を回顧して、その時の関係者や言動まで忘れられず、全く今昔の感に堪えないが、ひたすら修学のため忍苦に耐えることにしたという。そのお陰をもって今日、資料室から資料館となり、文字文化を媒体とする図書館と物質文化を媒体とする考古学資料館と共に、大学附属施設として国内有数の機関として誇れるようになった。

先生は昭和7年國學院大學国史料をご卒業になり、続いて研究科に進まれ、助手及び考古学資料室主任、この時からまさに将来の大博物館を目指し、国立科学博物館で棚橋源太郎先生に博物館人としての指導を受けたりして活動が開始されたのである。

一方、大和平野の遺物遺跡の調査、瀬戸内海原始遺跡の調査活動が先生のフィールドであり、卒業論文であつかった装身具の研究は引きつづき資料の充足に余念がなかった。さらにその間、大蔵精神文化研究所刊の「神典」に収録される古典の一つ「風土記」の解説分担をされ、文献史学への糸口を開き、「伊豫大洲の古代文化」はそれ以前に、また「日本原始文化史」「史前史」はこの間に稿を成したという。そして昭和18年「日本古代産業史」は先生の名著として高く評価され、斯学において各方面から引用され論じられてきた。

昭和9年鳥居先生は、中国燕京大学へ行かれることとなり、樋口先生はじめ一同でお引き止めするための嘆願書まで出されたそうであるが、その代わりに先生は講師を拝命し、予科の日本歴史と高等師範部の考古学を担当され、爾来44年間母校で教鞭をとられた。

昭和20年國學院大學教授、ご担当は日本史・考古学概論・文化人類学・自然人類学・人文地理学・社会科教育法、さらには昭和32年博物館学講座を開講されて博物館学概論も担当、非常に学域の広さとその蘊蓄の深さにはただただ敬服するのみである。こうして先生の学問領域は、次第に拡大されて日本民俗史学会及び全日本博物館学会の設立に尽力され、共に会長を勤めてこられ、まさに人間学的思考から、人間の生活文化史学の樹立に励み、学際的に研究された成果を、広く大衆に普及することに没頭されてこられた。その出版物は先生の身長を越える高さになったと言われていた。

学内では、学生部長・図書館長を歴任及び学外では数多くの大学で教鞭もとられ、ご多忙の傍ら、昭和54年3月停年御退職されるまで考古学資料館長として、必要な資料があれば自費で購入されて手塩にかけて育

ててこられた。そのように先生ご自身で収集された資料はすべて大学へ寄附された。先生は本当に博物館の父というべきお方であろう。

昭和30年には「日本石器時代身体装飾品について」で文学博士の学位を受領し、昭和47年紫綬褒章、昭和50年日本放送文化賞、昭和54年勲三等旭日中綬章を拝受された。先生は46年間の長きにわたり、國學院大學に勤続され、ご退職の際、考古学・博物館学発展のため、多額の金員を大学にご寄付され、それをもとに「樋口博士記念賞」を設定し今日に至っている。そして自ら学術的研究を基調として、テレビ・新聞・雑誌はもとよりマスコミを通じて、広く社会に学問に成果の啓蒙をはかり、高く評価されている。

これぞ88年間にわたる先生の実績であり、それに学んだ学恩に衷心より感謝する次第である。謹んで先生のご冥福をご祈念申し上げます。



國學院大學考古学資料館にて

樋口清之博士略年譜

明治42年1月1日 奈良県（桜井市）にて樋口清二の長男として生る。

昭和2年3月 奈良県立畝傍中学校卒業

昭和7年3月 國學院大學学部国史学科卒業

昭和7年4月 國學院大學国史学科助手

昭和9年3月 國學院大學研究科修了

昭和9年4月 國學院大學講師

昭和20年4月 國學院大學教授

昭和20年9月 青山学院女子専門学校講師

昭和24年4月 國學院大學学生部長・相模女子大学兼任教授

昭和26年2月 学校法人國學院大學評議員

昭和27年10月 大正大学兼任講師

昭和28年3月 國學院大學図書館長

昭和29年4月 高崎経済大学兼任教授

昭和30年3月 國學院大學より『日本石器時代身体装飾品について』で文学博士の学位を授与される。文部省社会教育局「学芸員資格認定に係る無試験認定の審査委員」

昭和32年6月 全国大学博物館学講座協議会委員長

昭和36年4月 日本女子大学講師

昭和40年 日本放送協会「学校放送暮しの歴史番組委員会委員」

昭和45年3月 学校法人國學院大學評議員

昭和47年11月 紫綬褒章受賞

昭和48年 全日本博物館学会会長、日本風俗史学会会長

昭和50年4月 日本放送文化賞受賞、國學院大學考古学資料館館長

昭和53年4月 日本博物館協会理事

昭和54年3月 定年により國學院大學文学部教授を退職

昭和54年4月 勲三等旭日中綬章受賞
國學院大學名誉教授・國學院大學考古学資料館名誉館長

昭和56年4月 國學院大學栃木短期大学学長

平成4年6月 全日本博物館学会名誉会長

平成7年3月 國學院大學栃木短期大学学長を退任

平成7年4月 國學院大學栃木短期大学名誉学長

平成8年11月 渋谷区政功労者表彰

平成9年2月 逝去 享年88歳